都会の商店街における

車椅子の共有システム

概要

私は、商店街の中の既に店がなくなってしまい、シャッターで閉められている空間を「可能性を秘めた空き地」であると考えた。そしてその空間を利用した、商店街の中ですぐに車椅子を利用できる「車椅子の共有システム」を提案したい。

1. 問題提起

今回の「空き地を生かし、人々の生活を豊かにする」というテーマを考える上で私はまず、自分に身近な街が「なにを必要としているか」また「どんな問題を抱えているか」に焦点を当ててみた。

私は東京の杉並区に住んでいるのだが、日々の生活のなかでご年配の方たちが多く暮らしていると感じることがある。例えば、昼間にバスに乗るとその乗客のほとんどはお年寄りだ。しかし、東京の街がお年寄りにとって住みやすいかと言うと、決してそうではない。特に足腰の弱い方にはバスや電車などが主流の移動手段は酷なのではないかと思う。また一方で、全国でシャッター商店街化が進んでいる。特に地方の商店街は、大型ショッピングモールの進出や、住民の高齢化によってほとんどの店が閉店に追い込まれているところも少なくない。そしてそれは都会の商店街も例外ではなく、地方より活気があるとはいえ、駅前の開発などによってシャッター化が進んでいる。また、現在繁盛している商店街も、これから住民の高齢化によって顧客は減っていってしまうだろう。今必要なのは、高齢者の方も買い物し易い商店街作りである。

閉店した店の空間は飲食店のチェーンなどになることもあるが、そのままになっているところが多い。この空間もひとつの「空き地」である。そこで私は、上の問題意識から、この空き地を次のように利用することを提案したい。

2. 提案

私の提案は、「商店街の閉店してしまった店の空間に車椅子を数台おいて商店街の中で車椅子の共有システムを作る。」というものだ。具体的には、商店街のなかに数カ所、閉店した店の空間を利用した車椅子貸し出しの拠点を設置する。そして、利用者が商店街のどこにいてもすぐに車椅子が利用でき、またどこの拠点でも返却出来るという仕組みを確立するのだ。この提案はフランスをはじめとする欧米諸国の主要都市で実用化されている自転車貸出システムから着想を得た。

この自転車貸出システムとは、市内の至る所にある拠点で利用申請をすれば２４時間すぐに自転車が利用でき、またどこの拠点でも返却ができるというものだ。

つぎに、この提案がどのようなメリットをもたらすのかについて述べたいと思う。私は大きく分けて二つのメリットがあると考えている。ひとつは、商店街を利用する足腰の弱い年配の方、怪我をしている方、妊婦の方など長時間の歩行が困難な方たちの負担の軽減である。そしてもう一つは、利用者増加による商店街の活性化だ。

まず一つ目についてだが、商店街での買いものでは長時間歩かなくてはならない。そのため、上で述べたような方たちにはとても負担のかかるものになってしまう。しかし、商店街はその地域のひとたちの主な食料や生活用品などの主要な調達場所となっていることも多い。そのため、車椅子が商店街のいろいろな場所で借りられ、また返却ができればそのような歩行が困難な方達の生活の負担を大きく減らせると考えられる。

そしてもう一つのメリットは、商店街の活性化だ。このメリットが期待出来る理由は、都市部人口の高齢化である。これからの都会では、高齢者が超高齢者を介護していくことになるだろう。そのなかで私の提案である車椅子の共有サービスを実現し、より高齢の方も買い物できるようになれば、商店街の利用者は増え、結果的に活性化していくきっかけになるだろう。

3. 課題

前でこの提案のメリットを述べてきたが、ここではこの提案を実現するにあたって、解決しなければならない課題について述べようと思う。私はこの提案は三つの課題を抱えていると考えている。一つは運営のコスト、二つ目は車椅子の盗難対策、そして三つ目は各店における車椅子利用である。

やはり一番に考えなければならないのはコストの問題である。この提案は「誰でも利用できる」ことを目指しているため、無料またはきわめて低価格であることが望ましい。しかし、貸出拠点と車椅子の準備費、人件費などをあわせると決して安くはないだろう。また、車椅子はとても高価なものであるため盗難対策についても考えなければいけない。これらのコストと盗難対策についての課題は、前に挙げた自転車共有システムも抱えているが、拠点のセルフサービス化や各自転車をコンピューターで管理し、利用申請時に個人情報を要求するなどして解決している。これを参考にして、車椅子貸出システムの運営形態は次のようにしたいと思う。

- 貸出拠点は基本的にセルフサービスにするが各拠点に一人程度スタッフを配置して登録手続きなどを行ったり、乗り降りを手伝う。
- 貸出手続きは登録時に発行されるカードを電子処理して行う。
- そのカードの登録時に住所などの個人情報を要求するとともに、ご高齢な方や障害のある方が無料で使えるように優遇する。（シルバーパスのように）
- 各車椅子はコンピューターでどこの拠点にあるのか、またはどの登録者が利用しているのかを常に管理する。
- 料金は一回がバス料金と同じ程度が望ましい。

各店における車椅子利用も大きな課題である。そもそも、ほとんどの商店街の店は車椅子での利用を前提にはしていない。そのためもしこの車椅子の共有システムを実現できても、このままではメリットは少ない。商店街全体が車椅子の利用しやすい商店街作りに取り組んでいかなければならないだろう。具体的には店の入り口を広くして、簡単なスロープをもうけて、車椅子に乗っていても入店し易いようにするなどが考えられる。

4. 発展

最後にこの「商店街の車椅子の共有システム」がどのような可能性をもっているかについて述べて、私の提案を終わらせたいと思う。私はこの共有システムを一部の商店街だけではなく、東京都内の駅や駐車場などにもひろげて、都内でいつでも、どこでも、誰もが車椅子を気軽に使える巨大なネットワークをつくることができたら、これからの社会をいきる人々の生活をより楽にできると思う。また、日本と同じく高齢化の進む他の先進国に対してのモデルケースにさえなり得るかもしれない。私はこの提案のように、いままでは社会的弱者とみなされていた人々も住みやすい社会にこれからなっていくことを願うと同時に、これからの社会を支えていく世代としての責任も自覚していきたい。

上の地図は東京都杉並区の高円寺駅周辺の地図である。緑の線は商店街を、赤色の印はすでに店がなくなってしまっている所（実際に歩いて調べた）を示している。仮に上の赤色の所をすべて私の提案である車椅子の貸出拠点に利用できれば、商店街のどこにいても近くの拠点で車椅子を借りることが可能になる。しかし、実際に歩いてみて感じたのは、各店の入り口はとても狭い上に、もうすでにそれが限界な所もあり車椅子では入りにくい所が多くあったということだ。そのため課題のところで述べた「店の入り口を広くする」という単純な方法には限界があるかもしれない。その代行案としては、車椅子を利用する方に同行して車椅子での買い物をサポートするボランティアを行うなどが挙げられる。